

時	論
新	論
理	想 論

ゴミから革命

平井 京之介

(ひらい きょうのすけ)

本館民族文化研究部

成功した水俣方式

「ゴミとは人間が利用したあとの不要物、いわばカスのことだ。たんなる「役に立たないもの」ではなく、人間が出すのである。同じものでもどう利用するかは人によってちがうから、出す「ゴミ」も人によってちがう。一人一人が確実に使う分だけ手に入れ、最後まで使い切り、それでも残る容器などをリサイクルしていれば、「ゴミ」は出なくてすむ。

こんな当たり前のことを真剣に考えるようになったのは、熊本県水俣市にある市民団体が半年ほど寄宿した経験がきっかけになっている。環境モデル都市の実現にとり組む水俣市は、水俣病の教訓を活かして環境に負荷の少ない暮らし方の促進を目指している。さまざまな施策のなかでも「ゴミの減量化は成功例として知られており、全国各地から行政担当者や修学旅行生がひっきりなしに視察に訪れる。

水俣方式は徹底していて、現在では二種類に分別している。「ビン」はそのまま再利用可能な「生きビン」と、その他の「雑ビン」に大きく分けられるが、雑ビンはさらに色によって透明、水色、茶、緑、黒の五種類にわけられる。廃プラや缶、ビンは洗ってから捨てるのだが、水俣市民はプラスチック製の弁当がらさえ洗剤を付けたスポンジできれいに洗ってから捨てていた。



ビンと缶の分別 (熊本県環境センターの展示より)

分別には迷うものも少なくない。表示がなくて、アルミ缶かスチール缶かわからない。シーチキンのは埋め立てゴミだとしおりに書いてあるが、イワシ缶はどうだろう。硬いプラスチックは燃えるゴミだというのが、どれくらい硬いと「硬いプラスチック」なのか。レトルトカレーの袋はなかまで洗えないが燃やす「ゴミ」か、

それとも埋め立て「ゴミ」か。

資本主義に対抗

悩むうちにいろいろ考えるようになってきた。捨てるときに迷うもの、カスが出そうなものは買わない。容器に材質表示がないものは避ける。なるべく形状が洗いやすいものを買う。頻繁に飲むなら紅茶よりコーヒード。ティーバッグだと、ホチキスははずして埋め立て、バッグは燃やす「ゴミ」、中身は生「ゴミ」という分別の手間がかかる。使う量はどれくらいか、カスが出るかどうかをよく考えてからものを買うようになった。生活スタイルの再点検である。

ドンドン作ってジャンジャン壊すのが資本主義の思想である。資本家は宣伝広告を通して次から次へとあまり必要でもない製品を買わせようとする。我々は深く考えもせず、彼らにすり込まれた生活を追い求めて製品を買い、ろくに使いもせずに捨てる。これで資本主義は発展する。だとすると、我々が立ち止まって自らの環境を見つめなおし、身の丈にあった生活を自ら組織していくことは、資本主義支配に対する闘争となるのではないか。

ベルリンの壁崩壊以降、社会主義者は右往左往しつつ方向性を見失っている。今こそわたしが示そう。二一世紀の革命は「ゴミの分別」によって達成されるのだ!